

百人一首一文話



百首

一首一夕話卷之七

目錄

崇徳院 御製

美福院 の歌

鎮西八郎 の歌

西の白峰 の歌

源兼白 の歌

左京大夫 頭輔 の歌

人麿画像 の歌

表歌 の歌

待賢門院 堀川 の歌

後徳大寺 左大臣 の歌

六條

官軍白川殿 の歌
新院 讚岐 の歌
久の松 の歌

後成 頭輔 の歌
六條家 の歌



実定公顯長卿贈答の歌の詠

内侍有子の詠

内侍有子入水の詠

貢米の船難風よ遭詠

名將の大将の詠

道因法

馬の助の詠

盲法師が責く読歌とくわりの詠

皇太后宮大夫俊成 歌譯

俊成顯隆の養子となく顯廣のひり詠

基俊の弟子となく桐火桶の歌の詠

九十の賀の詠

藤原清輔朝臣 歌譯

續詞元集戲笑歌の詠

後惠法師 歌譯

鴨長明俊惠の才子と詠

俊成の難了詠

佐藤兵衛正宗の詠

内侍共清盛の館と泰詠

実定公社頭月の歌の詠

西行徳大寺家と泰詠

歌合よる清輔の恨詠

俊成自讃の歌の詠

はる羽院の序の詠

ガノこの入道といひ詠

俊成賤の女と連歌せり詠

尚書會の詠

俊惠他人の歌詠

俊惠七讃の歌の詠

御講八頭仁も御院
 第一の皇子内母ハ
 待賢院し元小ニ
 五月廿八日三条鳥
 九の亭にまゐらせ
 保安四年二月五日
 内即位なり保
 元二年七月にむ
 出家年月
 讃岐國に
 長寛二年八月彼
 小吉朋治承元
 年七月崇徳院
 謚をせり

宗徳院

洲とをやいりやな
 ちものりきま
 ぬまじりか

詞苑集恋上取ありすし
 早き流河中のり
 末をいひひのな
 中

一旦別... 宗徳院の詔

宗徳院の詔

帝保安... 保延五年... 上皇... 體仁君... 宗徳院の詔... 體仁君と保子即たま

一... 宗徳院と新院... 皇太后... 藤原... 體仁君... 體仁君と保子即たま

いかに
つとに紙をつつて保え交戦の
闘う人物の終に兵の益の利を
史の挿挿者皮用はふとて

為朝九石をひく。夫ふ
力の取に一歩はひく。夫ふ
中。我相の枝の枝の
とす。と。夫ふ一夫を
今試はす人を我解せん。







大朝進とあぐりけの八夫兵ハ神速と名のしつしハ今晚暗と
皇居ヲ襲ひしは風の勢より大に放ちしは義朝の
勇武たるもあぐりけの清盛ハ不意の者
とておのねもいりしそ天皇の所與に任じし
所與に任じしは天皇に奪ひしは
瞬一内はしりけしは長らるの計は候らしりしは
つら明日ハ南都の衆徒一千餘ありしは
おとすしとのこすお朝の所與に服せしは
夜討の議とせしは入らしりしは
義朝の方とせしは依侍しりしは別奏しりしは
南都の加勢とせしはゆるめしは
兵とも院の所與に圍しりしは其不意に討しりしは勝利とせしは必す

とて衆議ハ北地とせしは
小如おれしは
は義朝清盛れぬ軍陣事しりしは急は白川の
つら頼長大軍勢ありしは
あぐりけの先戦士の心は
補し其餘教輩は官軍に候けんしりしは
日の勤ハ敵と亡すは
つら其官軍受す既ハ官軍に候けんしりしは
つら東の門は
つらつら時法盛ハ先鋒伊右景綱伊右五伊右六進ハ
おのれと討く伊右六ハ胸板と貫き背と刺して伊右五ハ
其矢とせしは清盛ハ士平標とせしは思てす

けき八院軍大潰れての地を走るに時右衛門大夫家弘其子中六の侍長
光弘馬に身かき白川殿の春日表の小門よりとせよ官軍軍の
如くやめぬと上猛火既よはけ所と覆ひひ今ハ叶せられし
しすうき何方も所ひさひしとせは只今かめしゆのや
新院の東西よりなひく所伴大らせハれ長へ前はよまひ只
女の命たすけささるる心ひり其内は新院も所馬よめれり
りつちのよ危くもせしや一藏人信実居るの死よあく抱さ
りや頼長公の了れ死ハ四居かぬあく抱きりかて東の門より
はし小白川にささるる心せたまさるる心はしり
矢一筋あまくれ長の頭の骨より成隆よこら松坂折れ
血のこも夥しれハらも踏白すも割るも執りし
倒よなれしや成隆もけきとありて武部大輔盛憲頼長の所
頭と膝さきのせ神松頼まけのくは居り藏人土夫盛憲も馳
めまき抱きりかきかひり延れハ早く相崎の方へありり
可神とるる甲冑脱す経憲共よ小家のりりかき合て
先癩の口松谷けきも叶次第よりけきとありて夫目と
ハ喉の下より左の耳のよへ通すけきとありて夫のけきとあり
きかれ神矢なるもけきとありて血のよへ通すけきとあり
白青の物衣も継りやとありて赤目ハけきとありて
のなるすけきとありて斬りて体のきんとありて
経憲車よりせきかきとありて嵯峨の方へありて
のけきとありて赤目ハけきとありて梅津の方へありて
とありて赤目ハけきとありて赤目ハけきとありて赤目ハけきとありて

けき八院軍大潰れての地を走るに時右衛門大夫家弘其子中六の侍長
光弘馬に身かき白川殿の春日表の小門よりとせよ官軍軍の
如くやめぬと上猛火既よはけ所と覆ひひ今ハ叶せられし
しすうき何方も所ひさひしとせは只今かめしゆのや
新院の東西よりなひく所伴大らせハれ長へ前はよまひ只
女の命たすけささるる心ひり其内は新院も所馬よめれり
りつちのよ危くもせしや一藏人信実居るの死よあく抱さ
りや頼長公の了れ死ハ四居かぬあく抱きりかて東の門より
はし小白川にささるる心せたまさるる心はしり
矢一筋あまくれ長の頭の骨より成隆よこら松坂折れ
血のこも夥しれハらも踏白すも割るも執りし
倒よなれしや成隆もけきとありて武部大輔盛憲頼長の所
頭と膝さきのせ神松頼まけのくは居り藏人土夫盛憲も馳
めまき抱きりかきかひり延れハ早く相崎の方へありり
可神とるる甲冑脱す経憲共よ小家のりりかき合て
先癩の口松谷けきも叶次第よりけきとありて夫目と
ハ喉の下より左の耳のよへ通すけきとありて夫のけきとあり
きかれ神矢なるもけきとありて血のよへ通すけきとあり
白青の物衣も継りやとありて赤目ハけきとありて
のなるすけきとありて斬りて体のきんとありて
経憲車よりせきかきとありて嵯峨の方へありて
のけきとありて赤目ハけきとありて梅津の方へありて
とありて赤目ハけきとありて赤目ハけきとありて赤目ハけきとありて



先づけ道を
歩むに
道の國に
遊ぶに
左府
情
文
道
死

いふとおしとせしむるもなほいふはのちの頼とせむるはすなは
ま家弘といふはまはるは是なりし時けりてはなほいふは
せしむるもなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
中せは成すに皆しつらむるもなほいふは是なりし時
休じりてはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
たすうなんと作せられぬと始りてはなほいふは是なりし
ぬいふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
いふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
かていふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
恐しむるもなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
義忠ぬは二井さの方けりてはなほいふは是なりし時

方へ引おろしむるもなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
所出家りてはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
日暮りぬも家弘又よして肩けりてはなほいふは是なりし時
たのむるもなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
まのいふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
いふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
人音もなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
条坊門をてつぎに教長つは白川の畑の中はまはるは
てはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
いふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
の世の中なれり諸もなほいふは是なりし時けりてはなほいふは
今いふはなほいふは是なりし時けりてはなほいふは

久保 我なれは...
新院 遷宮...
六月廿九日...
清盛朝家と恨...
大元以下...
宗徳院...
春日の末北...
成花...
専ら...
かくて...
儀式...
送ぬ...
金銅...
己は...
故教長...
特別當...

今日遷宮...
厳重...

左京大輔顯輔の話

顯輔の又顯季の春のの大進陸経の治男なり大御言実方の養育
なり進物御もく一家の風となり常々人磨と慕ふなり
先も飯原善房夢人磨とて其夢中の像御書工よりせぬ白
ひ沈は献せしむと別名より信す人磨の像なり其甚る事と思
ふし白ひ沈はしむと信す人磨の像なり其甚る事と思
れと寫させ飯原敦光より其贊を傳らせは御伴とて其贊
とせぬの事ありは信す人磨の像なり其甚る事と思
せりし事なりは毎にこれとありし事なり其甚る事と思
うらうら御賞しはしひ讚めの里海士邑を賜りて人磨御供乃
奈田とせしめたりは其白ひ沈の御供なり人磨の像の

中紙焼失りしれ今ハ那中の字より係とてなりし事なり其甚る事と思
よくこれ御重宝なり自誓し我よりいとも和歌御書せし
者ハこれ御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思
せし事なり御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思
初御信す様せし御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思
御廣し御信す人の風作とて信す人磨の像なり其甚る事と思
風作とて信す人磨の像なり其甚る事と思
首御奉らばは拾遺集の恋の歌なり其甚る事と思
ゆふれは御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思
これ御表符なり又金葉集なり其甚る事と思
はよの御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思
こととすし御伴とて信す人磨の像なり其甚る事と思

の城おしほるよし

待賢門院 堀河の歌

待賢門院 大御言ふまつのむすあそむせし
子かへせらぬの院の后とせられたけ堀川の神祇伯乳
仲のむすあそむ前帝院のふ茶よりの妹なり女の秋
名にうらむくは続世絶よ人のむすを堀川の君も兵衛の君も
いふ人の家集一卷にり其中は新院の序前とけけるの秋十繪で
けりしむすあそむせしやそむすあそむせしむすあそむせし
ふすあそむせしむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし
むすあそむせしむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし

又新院の百首の中はむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし
女房かへぬ其ゆよし崇徳院のむすあそむせしむすあそむせし
けり又其集よ具し人のむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし
かへぬ

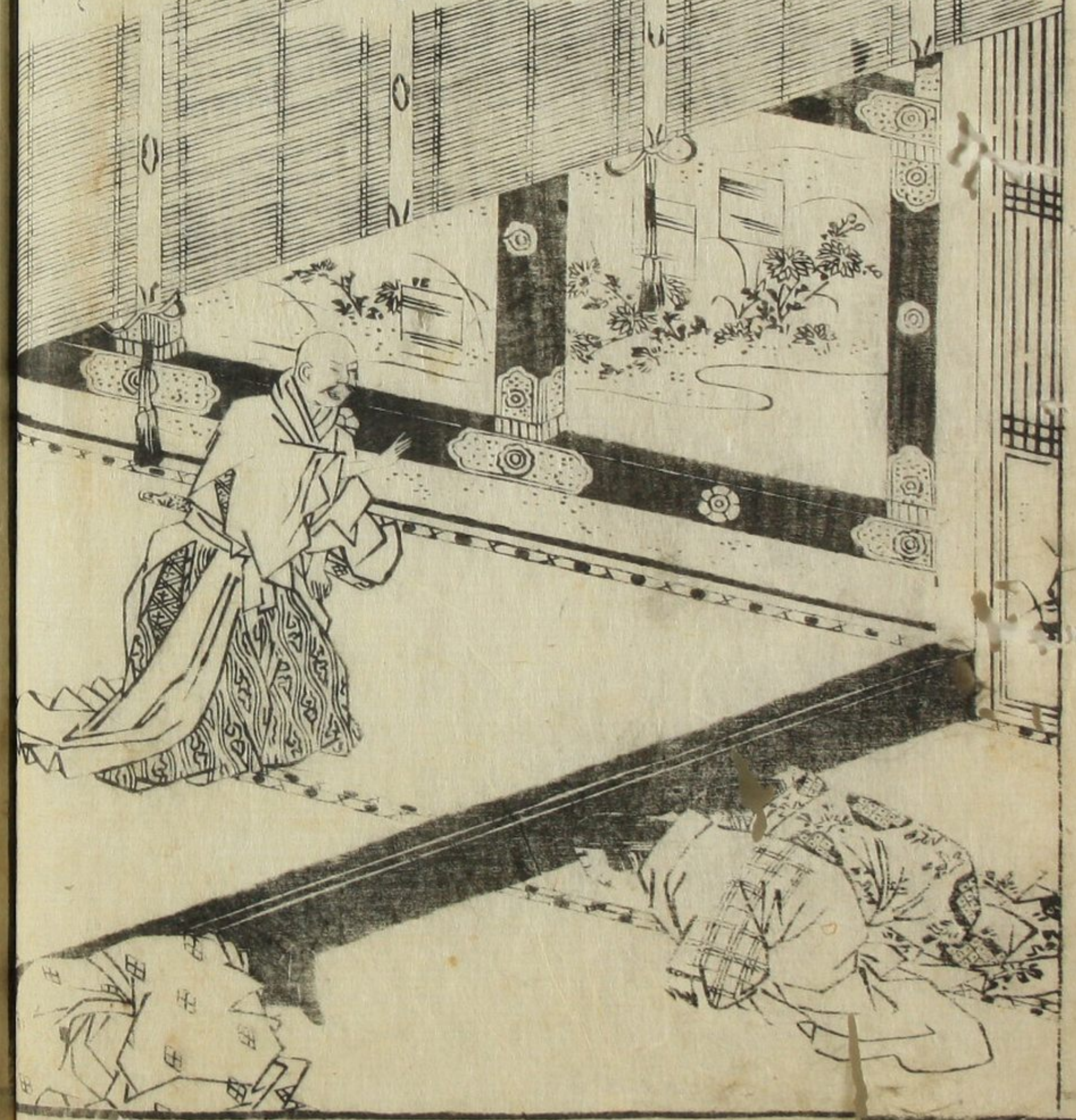
誰かむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし
むすあそむせしむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし
むすあそむせしむすあそむせしむすあそむせしむすあそむせし

大の... 徳大... 実定... 大納言... 才覚... 徳長...
... 家の重代... 今... 大の... あり... なる...
... 宗盛... なる... 恨... なる... あり...
... 家... なる... 大納言... 山家の...
... 前中納言... 長... なる...
... 秋... なる...

世の中... 実定... 山... 飛舟... 出家... 披... 禁中...
... 仙回... なる... 大の... なる...
... 別... なる...
... なる... なる... なる...

近... 作... 合... なる... 実定... 直宗... なる...
... 平家の... なる... なる... なる...
... 下國の... なる... なる... なる...
... 子孫... なる... なる... なる...
... 代... なる... なる... なる...
... なる... なる... なる... なる...
... なる... なる... なる... なる...
... なる... なる... なる... なる...

親王の御
 入道の御
 内侍の御
 公けの御
 且木の御
 小作の御
 下右馬助の御
 又ハ治部丞清孝直
 因俗名教頼位
 下右馬助



道因法師

けいひりてさくともりら
 けいものまゝさゝぬを
 けいりてさくともりら

千載集卷三
 命ハ...
 せす命ハ...
 せす命ハ...

祖又ハ對馬守教輔
 又ハ治部丞清孝直
 因俗名教頼位
 下右馬助

長秋宮の書ハ古来風體抄

又最勝光院の書ハ皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

又皇太后の御書ト云フ

五京大夫 藤原清輔の子
た、三位下 大進
后言 大進 兼 長 門 守
たり 承元年中 卒

藤原清輔朝臣

かろくしてさしつゆや一の
と 禮じりしきみせう
今きこひよ

新古今集 雑下 題ありすしつゆの家集 六のしつひ
のれりよと 余内六のしつひ ちのめくおりしつひ
けりしつひしつひ 昔のしつひおしひおしつひ
つらおれしつひ 秋のころしつひしつひしつひしつひしつひ

とすなりは其時ハ又今昔のしつひおしつひしつひしつひしつひしつひ
しつひしつひしつひしつひしつひしつひしつひしつひしつひしつひ

藤原清輔の話

清輔ハ堀川院鳥羽院崇徳院三代の朝に侍りて殊ニ歌の才を
ついで勅詠よりて詞花集と撰せしは又二條院の勅詠よりて
續詞花集と撰せしは其書奏後より前上帝崩しつひ
けせハ今ハ二十一代の勅撰集に入つて續詞花集ハ俳諧作
乃歌を戲笑歌として都とてしつひて戲笑歌の名目他の集
見たり又清輔ハ平生つら歌学を専ねらて故其才識つら
人としてつら見及しつひてつらつらつらつらつらつらつら
皆研究つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

散位藤原敦頼

大常卿顯廣王

前右州別駕祝部成仲

左部侍郎永範

故有此興矣

右京權大夫源賴政

散位大江維光

ひるらうのまうとある春のむゆゑなほと

とひう老よりいふはれいひういふはれいひういふはれいひう

予為三代之侍讀迫七旬之顔齡位昇三品今列七史

承安二年三月十九日於右莊嚴院講之講以右見介成仲有祿

讀以右京權大夫賴政朝臣

外垣下の人々太宰大貳重家皇居宮亮季經盛方伊豆守源仲

綱片圖祿宣位四位上加茂政平散位藤原憲盛散位祝部允成學

生藤原尹範僧顯昭等々其人々也百歌とゆへに垣下の人

衆の中なる僧顯昭ハ清輔の才にて國學ニ精しく其比いへば

學ひよんたせし人ハ頭昭一人ガリ古今集の注神中抄など著

されし其名をなせしはせすはをあり六百番歌合の時寂蓮法師

大寺殿の歌の回すくつるをなす故持法まらびとふとつけらる

とつる人のよし又長明の魚名抄は後成り清輔の才にて人

歌の判偏頗りていづる偏頗りていづる其の歌
 昭論していづる一頃和歌の判は後成りて法補の判は左も右も
 定めしむるも志あるも偏頗り判者其のまらりて後
 成り我も僻中をすすむけりてその難す時をいづるも
 法補の判は外も内もいづる法廉なるや偏頗なるをすす
 けりていづる法廉なるをいづるもいづる人のいづる判
 のいづる難しなるをいづる法廉なるけりていづる
 偏せりいづるいづる其癖をいづる難すいづるいづる
 字抄牧笛抄今撰抄なりといふ

大納言経信の孫
 して佐佐木
 まり

後編

月夜なぬおのひさし
 つゆはるる

千載集二巻の
 夜はほろのをいづるいづる夜は
 月夜なぬおのひさし
 つゆはるる

Handwritten text in a cursive script, possibly a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. The script is written in dark ink on aged, yellowed paper.

百人一首一夕話卷之七終

